

3

「感情／生き物はつながりの中に」(六年)



「教材研究のススメ」第一回では、「読むこと」の教材研究の三つの視点(読者・学習者・指導者として)を、第二回はその視点から実際に読んでいく過程について、具体的な教材を例に紹介しました。今回は、「二教材一単元構成の説明的文章を取り上げ、「指導者として」の読みに重点を置いた教材研究について、具体的に述べていきたいと思います。」

単元のねらい、教材の特徴をつかむ

六年の第二単元「文章と対話しながら読み、自分の考えをもと」は、二つの教材がセットになって構成されています。第一教材「感情」(茂木健一郎)は、見開き二ページ、六段落の短い文章。その後第二教材「生き物はつながりの中に」(中村桂子)が六ページ、七段落で続きます。単元名の「文章と対話する」とは



リード文

次のように言葉を当てはめて読むと、意図がよく分かる。

筆者(茂木健一郎・中村桂子)は読者(読み手であるあなたたち)に何を考えてもらいたいのだろうか。

筆者(茂木健一郎・中村桂子)の意図をとらえ、自分(あなた)の考えをもと。

呼びかけ(課題)

読み手である児童に、直接呼びかけている。

内言の例

で、第二教材では主体的に自力で読み進めるといった構成が取り入れられているのです。第一教材「感情」の欄外には、「あなたは、どのようにこの文章を読むだろうか」という呼びかけに応ずる形で、読み手が発するであろう内言の例が示されています。これを児童の内言モデルとして活用すると効果的です。その際、符号や記号を使って表現するなど約束事を決めておくのも効果的です。この例以外にも、自分のクラスの子どもならどんな反応を示すか、一人一人の顔を思い出して想像しておく、しっかりと受け止めることができるでしょう。

〈反応例〉

- ・ たしかにそうだ!!
- ・ どうしてなんだろう??
- ・ なるほど、そうかもしれない!
- ・ 「……」とはどういうことだろう?
- ・ うん、うん。あるある、こんなこと。
- ・ そんなの、ありえない。
- ・ 茂木さんっておもしろい。そう考えるんだ。

- 〈二教材構成の単元〉
- 三年 2 読んで、かんそうをもと
 - ・ 「イルカのねむり方」(幸島司郎)
 - ・ 「ありの行列」(大滝哲也)
 - 四年 2 読んで、自分の考えをまとめよう
 - ・ 「大きな力を出す」(西嶋尚彦)
 - ・ 「動いて、考えて、また動く」(高野進)
 - 五年 2 筆者の考えをとらえ、自分の考えを発表しよう
 - ・ 「見立てる」(野口廣)
 - ・ 「生き物は円柱形」(本川達雄)
 - 六年 2 文章と対話しながら読み、自分の考えをもと
 - ・ 「感情」(茂木健一郎)
 - ・ 「生き物はつながりの中に」(中村桂子)

従来教師主導の授業では、全ての児童に十分な「読む能力」を保证することはとても困難です。与えられた教材について一定の理解はできるかもしれませんが、その学習で身につけた力を使って、他の文章、他教科の資料等を読み取る力にまで高めることはなかなかできません。そこで、第一教材で丁寧に文章との「対話のしかた」を学び、その学習成果を使っ

どういうことでしょうか。

まず、単元名とともに示されたリード文に着目しましょう。ここからも分かるように、「筆者は何が言いたいの、何を伝えたいの」と考えながら読む態度「ああそうなのか、そう言いたかったのか!」と気づき、理解する力、または、「ううん、本当にそうなの? ああ、なるほどさういうことか」と反応しながら読む力を育てることが、この単元のねらいなのです。

さらに、ここでとどまるのではなく、「筆者の言うことについて私はこう思う、こう考えた」と表現する力をつけるころまでが求められているといえます。つまり、「主体的な読み手になるための能力」をつけることを目的にした単元なのです。「▼」の呼びかけ(課題)からも、それが読み取れます。

では、なぜ、二つの文章がセットなのでしょう。光村図書教科書では、第三学年以上の説明的文章に、こうした二教材構成の単元が位置づけられています。それは、児童に自力で読む力をつけてほしいという願いによるものです。

筆者の意図をつかむ

「たいせつ」を活用させる

一読しただけでは、「？」ばかりの一方的な対話になることも予想されます。そこで、筆者が読者に何を考えたいのか、正しく理解するために詳しく読んでいく、次の段階に導きます。そのためには、既習事項を想起させることが大切です。言語能力は、既習事項を活用した学習活動を繰り返し行うことでしか定着しません。例えば、六年では、次のような既習事項が考えられるでしょう。

- ・筆者の付けた題名の意味を考える
- ・問いと答えの文を探す
- ・何度も出てくる言葉に着目し、段落の中心となる語や文をつかむ
- ・接続語に注意して段落相互の関係をつかむ

・事実と、筆者の意見や考えを整理する
 ・文末に注意して意見とその理由をつかむ
 ・例や比喩に着目し、筆者の思いをつかむ
 これらの内容は、教科書の各単元の「たいせつ」コーナーにまとめて提示されているので、それを振り返ることも必要です。

す。本単元の「たいせつ」では、「筆者の意図をとらえ、自分の考えをもつには」として、次の三点が新たに示されています。



筆者の意図をとらえ、自分の考えをもつには

- ・筆者が、どのような事実を例として挙げ、自分の考えの理由や根拠としているのかをとらえる。
- ・筆者は、文章を通じて、読者に何を考えたいのか、どんな行動をしてほしいのかなど、筆者が文章を書いた目的を考える。
- ・「わたしならこうする」などと、自分の知識や経験、読書体験に引き寄せて考える。

新たな「たいせつ」が出てくるたびに、専用ノートに書き写させるなどしてまとめておくと、国語以外の教科でも、日常的に活用できます。

さて、第一教材は、「感情」という現象を脳科学から説き、分かりやすく表現した文章です。不安、後悔といった、一見、負の感情に思われるものであっても、実は、生きていくために備わった感情であることを説いています。

第二教材は、「生き物とロボット」の違いについて、それぞれの仕組みを比較・対照しながら、理由と根拠を明らかにするという手法で説明し、生きていることのかげがえのなき、生き物がつながっていることのすばらしさを率直に伝える文章です。

この脳科学者と生命科学者の書きおろしに、次世代に向けた温かくも力強いメッセージが込められていることが見て取れます。ぜひ、児童にこのメッセージを受け止めさせ、筆者との密度の濃い対話を経て、自分の思いや考えを発信させたいものです。

そのための具体的な指導につながる二つの文章の構成をまとめてみました。それが次ページの図です。まとめの時間の板書計画等の参考ともなるものです。矢印の使い方、色分け、枠囲みなど、自分なりの工夫を加えることもできるでしょう。

また、学習の手引き②「考えたことを友達と交流しよう。」では丁寧な指導が求められます。ここでは、自分の考えをもつための効果的な言語活動を設定す

ることが大切です。感想や質問を取り入れた筆者への手紙を書く、自分なりの具体例を考えた意見文を書く、学級の実態を反映したグループ討議や話し合い活動など、自分の考えをもつことを促すような手立てを工夫したいところです。教科書に例示されている、読書体験や自分の生活経験を活用する方法もありそうです。

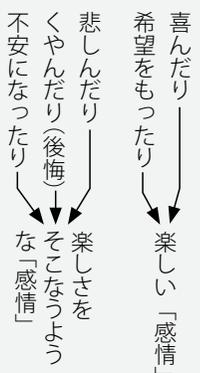
● ● ●

今回は、説明的文章の教材研究について考えてきました。

- ・単元名・リード文から学習のねらいを明確にする。
- ・手引きを参考に学習の手順を理解し、見通しをもつ。
- ・既習事項を想起し、それらを活用して課題解決に当たる。
- ・短い第一教材では欄外の内言を、第二教材では「たいせつ」を参考にする。

こうした手立てにより、自力で読み解き、読み進める力を身につけさせたいものです。

「感情」



なぜ、…楽しさをそこなうような感情があるのでしょうか。(問い)

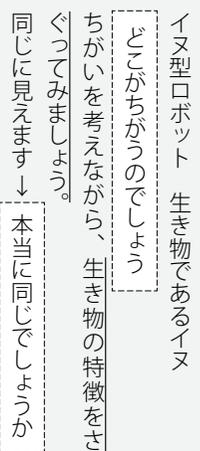
役に立つからです。(答え)
 例えは、不安…
 後悔…(例)

役に立たなければ、…残らなかったはず (二重否定・根拠の補強)

どんな感情も、生きていくうえで大切

← (まとめ・筆者の考え)
 自分自身を認め、受け止めていきましょう。(筆者のメッセージ)

「生き物はつながりの中に」



← (あらためて問う呼びかけ)

・外から取り入れたものが自分の一部になる…ようにながりが方々生き物の特徴 (呼吸や栄養と電池)

・変化・成長しながら、一つの個体として時間をこえてつながっている⇒これも生き物の特徴 (体重や身長、芸や思考)
 ・過去や未来の生き物たちとつながっている⇒生き物の特徴 (母から生まれる)

← (身近な例)

このつながりこそが…ロボットとのちがいは

← (まとめ・筆者の考え)
 あなたは、…かけがえのない存在…生きていくことが、とてもすてきに思えてきませんか。自分自身のこと大切…他も大切であるという気持ちになりませんか。

(筆者のメッセージ・投げかけ)